トレッドミル運動負荷試験と心臓カテーテル検査のデータ比較

○田平　昭彦 ,川越　由美子 ,常川　哲則 ,今田　周二 ,桐山邦徳
(医療法人医仁会　平井病院)

はじめに）
トレッドミル負荷試験は虚血性心疾患や潜在性心疾患の診断に用いられている。今回我々はトレッドミル運動負荷試験と心臓カテーテル検査による冠動脈造影検査のデータを比較検討することができたので報告する。
対象および検討方法）
２００１年１月から２００４年４月までに当院でトレッドミル運動負荷試験を実施し、その後３週間以内に初回の心臓カテーテル検査で冠動脈造影を受けた男性５５名、女性３２名の計８７名を対象とした。トレッドミル運動負荷試験の検査結果と冠動脈造影検査の結果を用いて対象を
Ａ群：トレッドミル負荷試験陽性で冠動脈造影陽性
Ｂ群：トレッドミル負荷試験陰性で冠動脈造影陽性
Ｃ群：トレッドミル負荷試験陽性で冠動脈造影陰性
Ｄ群：トレッドミル負荷試験陰性で冠動脈造影陰性
の4群に分類し、そのデータを検討した。
結果）
上記の４群に分類すると、Ａ群３２名（３７％）Ｂ群２名（２％）Ｃ群２４名（２８％）Ｄ群２９名（３３％）であった。またトレッドミル負荷試験の冠動脈造影検査に対する感度は９４％であり特異度は５５％であった。
Ａ群の３２名中冠動脈造影では１枝病変１９例、２枝病変７例、３枝病変６例であった。Ｂ群は２例とも冠動脈造影検査では３枝病変であった。Ｃ群の２４名中スパズムを指摘された症例は１６例であった。
考察）
トレッドミル負荷試験は冠動脈狭窄に対しては感度が高かったが冠攣縮性心疾患に対しては感度が低かった。
トレッドミルで陰性を示した症例３１例のうち２例は冠動脈造影では陽性であり3枝病変であった。
対象期間はそのままに対象群を初回の冠動脈造影に限定しなかった場合、感度６５％特異度５９％と特異度は大差なかったが感度は大きく低下した。
連絡先　０７４４－２７－１０７１（内線１３２）